

はじめに

昨年のノーベル賞では、日本人学者4名の同時受賞が大きな話題となりました。その1人である京都産業大学の益川敏英教授は、記者会見でノーベル賞を生む秘訣を聞かれ、「若者が育つ原動力はあこがれ。これがあれば、言われなくてもものすごく努力する。」「若者が面白いと興味をもつ『種』を広くまくことが重要だ。」と答えておられます。また、国際調査等の結果から日本の小学生や中学生の学習意欲の低下が課題となっていることを憂い、「あこがれ」をもたせることの大切さを繰り返し説かれました。分からないことをもっと知りたいという好奇心、未知なる科学へのあこがれが、益川教授の探究心や向上心をつき動かし、新たな見方や考え方をもちことにつながったのでしょう。

本県の子どもたちの状況を考えるとき、全国学力・学習状況調査では、学ぶ意欲の低さとともに、規範意識や社会性、生活習慣の確立などに課題があり、それらの間に強い関連のあることも明らかになっています。また、我が国の教育の共通理念である「生きる力」の育成には、その原動力となる若者の意欲を育むことをもっと考える必要があると思います。私たちは、子どもたちの学ぶ心に火をつけるために、好奇心やあこがれを大切にし、そこからの学びを支える指導を進めていかなければなりません。

さて、このたび平成20年度奈良県立教育研究所の研究指導主事等の研究を「研究紀要」に、長期研修員及び奈良県教育委員会指定研究員によるプロジェクト研究及び個人研究を「研究集録」としてまとめました。

これらの研究の成果は、平成21年2月に行われた教育セミナー“2008”及び長期研修員研究報告会において、既に一部が発表されています。その際、参加された先生方から多くの貴重なご助言をいただき、それらを踏まえて加筆修正し、まとめました。なお、ここに挙げましたものは、紙幅の関係上、研究内容を要約したものとなっています。より詳細な内容については、当研究所図書室に保管している「研究報告書」をご覧くださいと思います。これらの研究成果を積極的に日々の教育活動に活用していただくとともに、より一層の研究の進展のためにご高評を賜れば幸いです。

末筆となりましたが、鋭意研究に取り組まれた長期研修員及び指定研究員の先生方の、教育研究への熱い思いに敬意を表するとともに、今後ますますの精進を祈念いたします。また、それぞれの研究を進めるにあたり、温かいご支援をいただきました各関係校（園）の諸先生方に心からお礼申し上げます。

平成21年3月

奈良県立教育研究所
所 長 山 本 吉 延